Report on the Second Visit to the Japanese Enterprise in East China: March 2012

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34353

中国華東地域における日系企業等への再訪記録

―― 2012年3月 ――

弁　納　才　一

はじめに

金沢大学人材育成WG(2011年度が最終年度となっていた大学教育プログラム)の経費によって，2012年３月15日～22日のほぼ１週間にわたって金沢大学国際学類の学生８人[1)]をつれて，石川県に本社があり，中国華東地域に事務所や工場・店舗などを置いている銀行・企業などを訪問した。

今回，訪問した駐在員事務所や工場・店舗は，北国銀行上海駐在員事務所，北陸銀行上海駐在員事務所，石川県上海事務所(JETRO上海代表処)，ユニベール(無錫工場)，コマニー（南京工場，上海貿易事務所)，iseya(イセ屋)上海２号店，薇拉宮邸(かず美)南浦店・２号店である。その他に，上海図書館，上海書城(新華書店)，南京大学，南京大虐殺記念館なども参観した。

筆者は，以上の事務所・工場などを２～３年前にも訪問しており[2)]，個人的には今回の訪問によって各事務所・工場や中国華東地域経済にいかなる変化があったのかを意識しながら，学生の引率を行った。

また，今回の訪問に先立って入念な準備(下見を含む)と学生に対する事前指導も行った。すなわち，筆者が計４時間余りに及ぶ打合せ(２回の説明会と２回のミーティング)を，また，金沢大学外国語教育研究センター非常勤講師の周如軍が３日間にわたって計６時間に及ぶ実践的な中国語会話の特訓を行った[3)]。さらに，帰国後の３月30日午後，金沢大学内で反省会を行い，４月10日午後に成果報告会に向けた準備と打合せを行い，５月８日・９日昼休みに報告会を開催した。

なお，行きの3月15日は，金沢大学のマイクロバスで小松空港まで一般道を利用して送っていただいたが，帰りの3月22日は金沢大学の卒業式が挙行されるために，金沢大学のマイクロバスを利用することはできなかった。今回(3月15日～22日)の大まかな旅程は以下のとおりである。

15日(木)：午前，金沢市武蔵が辻を出発。13:30に小松空港を出発し，15:00に上海浦東空港に到着。夕方，上海のホテルに到着。

16日(金)：午前，北国銀行上海駐在員事務所を訪問。昼，上海から南京へ移動。
午後，コマニー南京工場を訪問。

17日(土)：午前，中国銀行南京市新街口支店において木股・木島の2名が学生を代表して日本円を人民元に両替。
昼，南京大学(図書館，学生食堂，金沢大学駐在南京事務所)を訪問。
午後，南京大虐殺記念館を訪問。

18日(日)：午前，南京から上海へ移動。
午後，薇拉宮邸(かず美)上海2号店・イセ屋2号店・上海図書館を訪問。

19日(月)：午前，北陸銀行上海事務所・石川県上海事務所を訪問。
午後，コマニー上海貿易事務所を訪問。

20日(火)：午前，上海から無錫へ移動。午後，ユニベール無錫工場を訪問。

21日(水)：午前，無錫から上海へ移動。
午後，淮海路(旧フランス租界)・南京東路・外灘(旧共同租界)を参観。

22日(木)：早朝5:30，ホテルをチェックアウト。12:30に小松空港へ到着(帰国)。

Ⅰ　上海市

(1)　北国銀行上海駐在員事務所

筆者が2009年9月に最初に北国銀行上海駐在員事務所に訪問した際に，同首席代表所長の筆安史氏にはいろいろとお世話になって，多くの事務所・工

場・店舗などを案内していただいた。そして，その後，筆安氏には金沢大学国際学類アジアコースの学生の富田亮太君をインターンシップとして受け入れていただき，さらに，同じくアジアコースの学生の西市衣里さん(2011年9月から北京に約1年間留学)もお世話になったと聞いている。

また，今回の訪問に先だって，すでに2月28日午前に筆安氏と今回の訪問に関して打合せを行っており，その大まかな旅程と訪問予定先の事務所・工場・店舗などの再確認を行うとともに，最近の上海の社会と経済について意見交換をしていた。その中でも，現在，上海のマンション価格は上昇が止まっているというお話しは興味深かった。さらに，石川県上海事務所の小田氏陽児氏を紹介していただき，また，上海駐在の日本人向けのフリーペーパーであるという『僑報』第152号(2012年2月)をいただいた。

なお，その時にちょうど発生した上海復旦大学日本人女子留学生に対する通り魔事件(白昼，突然顔面を切りつけられたという)も話題に上った。上海に駐在する日本人の中には，日本人だから狙われたのではないかと不安を感じた人もいたという。

現在，北国銀行上海駐在員事務所は首席代表所長の筆安氏を含む日本人2人と日本語が堪能な現地採用の中国人スタッフ1人の計3人の体制となっている。

今回は，北国銀行の行員で，三井住友銀行上海事務所で研修中の中野祐希氏(筆安氏と同じく金沢桜ヶ丘高校サッカー部の後輩)に主に説明していただいた(筆安氏によれば，研修の成果を報告する作業の一環として説明を任せたということだった)。

同事務所の接待室の席上には，「北国銀行上海駐在員事務所の業務」・「GDPは日本を抜いて世界第2位」・「日本と比べて賃金・物価はこんなに違う！」・「1995年の上海・2010年の上海(写真)」・「上海・日系企業の進出件数と金額(2005年～2010年)」・「最近の上海に出店したお店」・「日本の1人当たりGDPの推移との比較」と題した資料・レジュメが準備されていた。このうち，まず最初に，中国の各業種の賃金と各種の物価が空欄になっている「日本と比べて賃金・物価はこんなに違う！」を用いて，クイズ形式で学生に回答させ，学生の関心を集めるように工夫していた。

写真１．北国銀行上海駐在員事務所応接室
（正面中央が中野氏，その左側が筆安氏）

訪問日時：2012年３月16日　　9：00～11：00

訪問場所：北国銀行上海駐在員事務所（上海市静安区南京西路1376号上海商城350室）

応 対 者：筆安史・中野祐希

また，北国銀行上海駐在員事務所の業務は，中国に関する情報収集（『北国上海通信』の発行，各種専門誌への寄稿）・各種調査活動（販路開拓のための現地調査，中国の各種規制についての調査）・取引企業のサポート（上海・大連・南京で商談会開催，上海・蘇州でセミナー開催，資金調達サポート）の３点に大別することができる。

さらに，近年における日系企業の中国への進出の特徴として，「モノづくり」から「モノの販売」へ変化しつつあり，サービス・飲食・ファッション・生活用品などの業界の進出が盛んであるという指摘は，この後に訪問した企業や店舗などについてもあてはまることだった。

最後に，質疑応答の時間をとっていただき，訪問した学生からも積極的に多くの質問が出された（なお，その質疑応答の内容については，帰国後，学生各自が報告書を作成することになっている）。そして，筆者の質問に対しては，日本の地方銀行全64行のうちの32行が上海に駐在員事務所を開設しており，現在，中国政府が銀行から外資も含む企業・工場への貸付を制限しているので，資金繰りや

資金調達に苦労している日系企業に対して支援をしているが，資金需要の旺盛さを反映して中国国内では闇金融や高利貸が横行しているという説明があった。

(2)　北陸銀行上海駐在員事務所（北陸銀行上海代表処）

北陸銀行上海駐在員事務所の首席代表は，2009年９月に訪問した際に応対していただいた中条宏志氏（2011年１月より富山本店国際業務部に異動）から打本英治氏に交替していたが，当日は打本氏が不在だったために，副所長の浜田貴英氏に応対していただいた。

浜田氏は，1996年に大学を卒業して北陸銀行に入社し，日本国内のいくつかの支店を異動して，現在，勤続17年になるという。その間，北陸銀行の海外語学研修制度に応募して，１年間，遼寧大学（瀋陽）で中国語の研修を行ったことがあり，そのことが現在の上海勤務につながったかも知れないという。なお，北陸銀行には，この他に，４泊５日ないし１ヶ月の短期海外駐在員事務所への研修制度もあるという。また，北陸銀行は，アジアではすでにシンガポールにも事務所を置いているが，近年における日系企業のタイへの進出増加を見据えて，新たにバンコク事務所を開設する予定であるという。

写真２．北陸銀行上海駐在員事務所

訪問日時：2012年３月19日(月)　　９:00～10:30

訪問場所：北陸銀行上海駐在員事務所

（上海市長寧区延安西路2201号上海国際貿易中心602室）

応 対 者：浜田貴英

現在，北陸銀行は中国の華東地域で約200社の日系企業と取引関係を持っているが，北陸銀行上海駐在員事務所は融資や貸付などの銀行業務を行う資格・許可を中国政府から得ていないので（中国で銀行業務を行えば，増値税[4]を支払わなければならなくなる），中国で銀行業務を行っている日本のメガバンクや中国の銀行を通して送金などを行う際に北陸銀行が保証人になるなどして，日本にある本社から中国にある子会社への投融資を手助けしている。その他に，中国資本の製造工場との仲介や情報収集・情報提供なども主要な業務となっている。

浜田氏は，金沢市の出身であり，北陸銀行が富山市に本店があるものの，石川県の企業とも取引が多いことから，華東地域に進出している富山県の企業と石川県の企業が連携を強めて経済活動ができるようになり，そこに北陸銀行が支援していくことができるようになることを期待していた。

中国経済の現状について説明していただいたが（その中でも，やはり昨年来の金融引き締めによる企業の資金不足が大きな問題として指摘され，また，総経理と副総経理は中国人で，各部署を統括する部長クラスに日本人を配置する大企業が多くなっているという説明は非常に興味深かった），質疑応答も含めてその詳細は別稿で発表される学生のレポートを参照されたい。なお，日系企業が従来の低賃金労働力を利用した加工輸出型から中国国内の富裕層をターゲットにした内販（中国国内向け販売）型へ移行しつつあるというのは，中国経済で今まさに起こっている大きな変化を反映したものである。

最後に，学生の就職活動に関連して，自分がやりたい仕事（職業）を選択して就職すべきであるというアドバイスは，自分がどんな仕事をしたいのか不明確な学生が多いという実状からすると，学生にとっては非常に有益であると思われる。

また，北陸銀行ではディーリングの作業を担当させるために，理系（特に数学科）の学生を求めているが，毎年，必要数を確保するのが難しいという（就職する側と採用する側との間のミスマッチの一例であると言える）。あるいは，経済学類の統計学を専門に学んだ学生も適任ではないかと思われる。今後は，企業の人事課と大学の就職課との間のコミュニケーションをより一層緊密にしていく必要があるだろう。

(3)　石川県上海事務所

上述のように，２月28日に北国銀行上海駐在員事務所の筆安氏を訪ねた際に，以前の石川一哉氏に代わって新たに石川県経済交流部長となっていた小田陽児氏(2006年３月に赴任し，2012年３月末には任期満了で帰国し，石川県庁に戻るという)が，資料とレジュメを用意して説明してくれた。小田氏は，1995年に金沢大学法学部を卒業し，かつて南京大学に留学していたこともあったので，中国語が流暢な上に，かなりの中国通であるという印象を受けた。

なお，前回訪問した時とは異なって，各県の事務所はほとんど全てが21階に集約されていた。すなわち，21階は全て日本貿易振興機構上海代表処が占めていた。

写真３．日本貿易振興機構上海代表処

訪問日時：2012年３月19日(月)　　10:30～11:30

訪問場所：日本貿易振興機構(JETRO)上海代表処

(上海市長寧区延安西路2201号上海国際貿易中心21階)

応 対 者：小田陽児(石川県経済交流部長)

JETRO上海代表処の会議室に着席すると，資料として，「中国(上海)の一般経済事情」(A４版７枚)と「上海事務所の活動状況について」(A４版７枚)が卓上配布された。まず，中国(上海)の経済事情の概略について簡潔に説明していただいた後で，石川県上海事務所の活動状況について説明していただいた。その主要な活動内容は，県内企業の中国ビジネス支援，県内進出企業の支援，

情報の収集・発信，県内団体等への便宜供与，上海領事館関連イベント(例えば，直近の事例では，2012年2月24日～26日の「元気な日本の展示会」がある)への参加などである。このうち，特に重要なのが県内企業の中国ビジネス支援で，具体的には，個別相談に対応するためにジェトロアドバイザー・コンサルタント・弁護士・日系大手商社などを紹介したり，経済開発区を紹介してそこへの訪問をアレンジしたり，バイヤー(買付業者)や小売業者などとのマッチングを行ったり，展示会への出展をサポートしたりしている。

ただし，2010年11月に石川県食品協会と南京・常州の高級スーパーマーケットのバイヤーとの商談会をアレンジし，その後，南京のスーパーマーケットが石川県の食品メーカーと冷凍食品の納入について成約したしたが，2011年3月11日に発生した東日本大震災に引き続いて発生した福島原発事故によって日本の食品は輸入禁止になってしまっているという。

最後に，筆者が県レベルを超えた地域連合(北陸地域や中部地域など)を形成して一丸となって特産品の売り込みや観光客誘致などをはかるべきであることを提言したが，縦割り行政の弊害を乗り越え，かつ，各県間の利害を調整するにはさまざまな困難があるものの，部分的には連携の動きが見られるという(例えば，日常的に情報交換したり，物産展を数県共同で開催したりしている)。

(4)　コマニー上海貿易事務所

当初，コマニー上海貿易事務所への訪問を打診して断られていたが，2012年3月6日にコマニー南京工場を訪問した際に，改めてコマニー上海貿易事務所への訪問をお願いして了承を得ていた。その時に，会議への出席のためにたまたま南京工場に来ていた上海事務所責任者の西出稔氏(技術本部本部長)と華東氏(慶応義塾大学留学，上海市出身)に応対していただくことになった。また，当該事務所が入っている世界貿易商城(写真4を参照)はJETRO上海代表処などが入っている上海国際貿易中心のすぐ近くにあり，筆者は3月10日に下見をしていたが，当日は日曜日だったので，ビルの中に立ち入ることはできなかった。

写真４．世界貿易商城

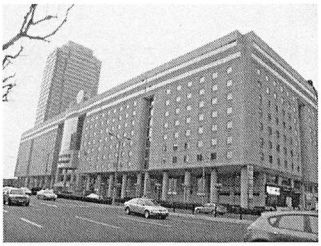


写真５．コマニー上海貿易事務所

訪問日時：2012年３月19日(月)　13:30～15:00
訪問場所：コマニー上海国際貿易事務所
（上海市長寧区延安西路2299号上海世界貿易商城2109室）
応 対 者：西出稔・華東

コマニー上海貿易事務所は，12年前に設立され，コマニーの国際貿易事務を担当する営業所であるが，コマニー南京工場が当初より全製品を中国国内で販売してきており，輸出することを考えてこなかったこともあって，当該事務所は現在でもあまり十分には機能していない。今後は，中国で仕入れた部材を日本の工場や東南アジアへ輸出することを検討しているという。

以上のような事情から，しかも，すでに南京工場で話しを聞いていることもあって，話題は中国（上海）経済の実状や今後の日中経済の在り方などに移り，主に華東氏が興味深い話しをしてくださった。特に，マスコミなどの情報に安易に流されず，自分の目で中国を見て判断するべきことを力説されていた。また，筆者と西出・華東の両氏との間で，現在，中国の若者と日本の若者は，その考え方や感性あるいは生き方において非常に近似していることを確認した（「最近の若者は」という中高年の愚痴も含めて）。

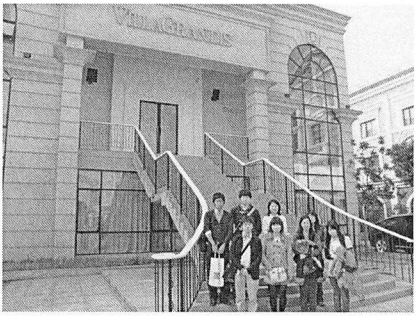
(5)　かず美（微拉宮邸）

2009年９月に初めて訪問した時には，微拉宮邸楊浦店・１号店（黄浦公園の近く）のみだったが，上海では今回訪問した微拉宮邸南浦店・２号店を展開し，さらに，安徽省合肥市[5]に３号店（フランチャイズ）を展開している。なお，

上海市南京西路1373号(北国銀行上海駐在員事務所の近く)に結婚披露宴の予約受付を行う営業本部(「銷售中心」)を置いている。

当該2号店は，地下鉄4号線塘橋站から徒歩15分余りのところ(南浦大橋の近く)にあり,宴会場からは黄浦江を見渡すことができた。なお,筆者は，2号店には3月10日に下見に来ていた。当日は，日曜日ということもあって，午後に2組の結婚式・結婚披露宴が予定されていて，我々が到着した頃には従業員が準備におわれていた。そのため，最初に宴会場・控え室などを案内していただいた。

写真6．微拉宮邸南浦店



訪問日時：2012年3月18日　　午後

訪問場所：微拉宮邸南浦店・2号店(上海市浦東新区浦明路1888号愛琴海大道5号楼)

応 対 者：吉田聡美(銷售本部長)・吉田豊(婚礼品質管理科長)

2012年3月18日現在，従業員数は，1号店が97人，2号店が46人で，日本人スタッフは3人である。近年，中国資本のブライダル産業の躍進がめざましく，同業他社との競争が激しくなっており，特に同社を模倣してサービスのレベルをアップさせてきている上に，より豪華な設備を投入して同社を凌駕するところも出て来た(同社が設備を更新して対抗するのは経費上困難であるという)。逆に，最近，吉田聡美氏も中国側の同業他社の式場・店舗に潜入捜査に行ってきたという。

中国でも北と南とでは文化的な違いがあり，結婚式ついては，北部では午前中に行う(午後に行うのは再婚や不正常な結婚である)のに対して，南部(上海)では午後に行うのが一般的であるという。上海におけるご祝儀の相場は，親戚が1万元，友人が1,000～2,000元だという。また，ブライダルメート(新郎新婦の親しい友人が正装で付き添い役をつとめる)が控え室にまで同行するという。たしかに，入口で白いウェディングドレスを身にまとった女性(新婦)のすぐ後ろをウェディングドレス風のミニスカートをはいた女性が付き添っていたのを見た(ブライダルメートだったのだろう)。

かず美の上海店では，金沢大学に対して学生のインターンシップ受入をすでに表明しているが，その後，何の連絡もないという。改めて確認したい。今回の訪問では，女子学生が多かったせいか，学生の間からは非常に印象に残ったという声が多く聞かれた。

なお，吉田聡美・吉田豊の両氏は，南京市では反日の気運が強く，日本人に対して反感を持っている人が多いのではないかと考えており，南京にはいまだに行ったことがないし，また，行きたいとも思わないという。

(6)　iseya

今回の訪問に先だって，事前に連絡を取り合ったところによると，かつての店舗(南京東路)以外に，徐家匯区(地下鉄1号線徐家匯站)の港匯広場4階にも新たに店舗を構えるようになったという。当該店舗は，地下鉄の駅と直結する駅ビル(中央のホールが最上階まで吹抜になっている巨大なショッピングモール)[6]の中にあった。

上海店の総経理の伊勢利子氏は所用で日本に行っており，都合がつかなかったので，副総経理の伊勢寿哉氏(伊勢利子氏の長男)に話しを聞いた。同氏は，1980年生まれで(現在は32歳)，27歳の時に上海に来た。なるべく早く海外に出かけていったほうがよいという母親(伊勢利子氏)の教育方針もあって，高校生の時，ニュージーランドに1年間留学した(ちなみに，姉は中学生の時に海外留学し，現在はドイツ人の夫とドイツで暮らし，仕事をしている)。

徐家匯の店舗は伊勢寿哉氏が経営を任されているようであり，中国人の女性スタッフと2人で接客にあたっていた。我々が到着した時，伊勢氏が接客

中だった２人組の中年女性は，身なりや話しぶりなどからしていわゆる富裕層のように見えた。この２人の女性客は日本に行ったことがあるので(留学したのか否かは不明)，日本語ができるばかりでなく，日本製品の質の高さも理解しており，高価ながらも日本製を購入するのだという。伊勢氏は非常に流暢に中国語を話すが，この時は，客が日本語を理解していることから，日本語を交えて接客していた。

写真７．iseya上海２号店

訪問日時：2012年３月18日(日)　　午後
訪問場所：イセ屋上海２号店(徐家匯区港匯広場４階イセ屋店舗)
応 対 者：伊勢寿哉

店舗は狭いので，上階の喫茶店で話しを聞いた。イセ屋は，もともと日本で呉服屋(父親が社長)を営んでいたが，和服の需要拡大が見込めないことに鑑みて，和服に関連する小物雑貨を開発し，母親の伊勢利子氏が2002年に上海に進出して販売を開始した。なお，人民広場と福州路の近くの来福士広場３階にも店舗があるという。

若い頃に自らがいろいろな仕事をした経験から，失敗してもやり直せるのでいろいろなことをやってみて失敗したほうがよいということを力説されていた。その中で，フラワーアレンジメントの仕事をしていた時に，当時はフランス流が一般的だったが，フランスないしフランス人のまねをするよりも，日本人であり，呉服屋の跡取り息子である自分の立場から考えて，あえて日本風にアレンジすることが日本人である自分の強みになることを学んだとい

う。このことは，同店舗で販売されている商品の小物類にも生かされており，中国製品との差別化がはかられている。

応対していただいた伊勢寿哉氏は，話しがうまく，若いこともあって，学生が受けた印象は非常によかったように思われた。

(7) 上海図書館

3月18日(日)夕方，上海図書館を訪問した。ただし，当日は日曜日だったために，筆者がいつも利用している近代史資料閲覧室は利用できなかった。イセ屋の上海2号店を訪問した後だったので，徐家匯站から地下鉄1号線に乗車して隣の衡山路站で下車して10分ほどかけて歩いていった。

学生たちは，一様に，その高層かつ広大さに驚いていた。しかも，交通アクセスの良さ(地下鉄10号線上海図書館站出口の目前にある)や閲覧・複写の利便性の高さにも感心したようである。ただし，時間がなく，学生の図書閲覧カード(カード作成料金は無料で，有効期限は2年間)を作ることができなかったのが残念だった。

(8) 上海書城

2012年3月21日午後，上海市黄浦区福州路の新華書店(上海書城。上海市内で最も大きな書店である。)を訪問した。学生が各自の関心に基づいて自由に(とは言っても，一応，2～3人のグループで)同書店内を見て回った。だが，同書店のあまりの広大さに圧倒されて，学生たちは2階のみしか見ることができず，全ての階を見て回ることはできなかったようである。このため，ある1人の学生は書籍1冊を購入したが，もう1人の学生は購入したい本が見つかったものの，時間が足りなかったために書籍を購入することができなかった。

(9) その他

初日の3月15日は，翌日の南京行きの高速鉄道の切符を購入することを考慮して，上海駅前のホテルに宿泊した(このホテルはもともと3星ホテルで，宿泊料金が安かったので，筆者もかつて何回か宿泊したことがあったが，最近，建て直して5星ホテルになった)。ただし，建物は立派になったものの，

サービス・接客のレベルは5星とは言い難かった。いずれにせよ，夕食は上海駅前にある庶民向けのレストランを利用したが(筆者はかつて何回か利用している)，若いウェートレス(上海人ではない)に韓国人かと尋ねられた。最近，韓国人が多く来るようになったということだろうか。

II　南京市

現在，南京市では地下鉄3号線(最新の2012年版地図によれば，長江北部の浦口区の林場站から南京火車站を通って江寧経済技術開発区の秣周路站に至る路線である)が建設中である。

かず美(微拉宮邸)の吉田両氏と同様に，学生たちも南京は反日の気運が強いのではないかと少し危惧していたようだったが，実際に自分の目で南京を見ることができたのは非常に意義深かったと思う。今回の南京訪問で学生たちの南京に対するイメージは大きく変わったようである。

(1)　コマニー（格満林(南京)実業有限公司)

筆者は，2009年9月に同社南京工場を一度訪問しており，その際には，沢田直樹氏(董事・総経理)，大森光紗氏(董事・副総経理)，村中敏昭氏(経営管理企画本部副本部長)に説明していただいた。

今回(2012年3月16日)の訪問に先立って，筆者は3月6日に下見を兼ねて同社南京工場を訪問していた(eメールによる事前の連絡によって，3月中旬には総経理をはじめとして主要な経営陣が日本に戻っており，我々が訪問する当日は適当な担当者を配置しておくという説明を受けていたので，その担当者との顔合わせもしておこうと考えてアポなしで突然訪問した)。その際，事前連絡なしの突然の訪問にもかかわらず，運良く董事・総経理の沢田直樹氏とも再会することができて，会議室で昼食(社内の弁当)をご馳走になりながら，4時間近くにもわたって今回の訪問に関連する入念な打合せと近年の中国経済動向に関する意見交換をすることができた。その場には，大森光紗・村中敏昭の両氏に加えて，加藤準太氏(生産・安装本部本部長)，西出稔氏，華東氏も同席していた。また，前掲の上海事務所(責任者は西出稔氏であると

いう）を訪問することを了承していただいた。さらに，今回の訪問には村中敏昭氏が応対していただくことも確認していた。

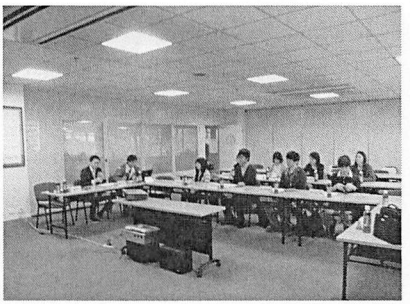
2009年９月に初めて訪問した時には，まだ地下鉄がなかったので，タクシーで乗り付けたが，前回（３月６日）と今回はその後に開通した地下鉄１号線の延長線を利用した。当該工場は，地下鉄１号線南延長線の竹山站（隣の駅は台湾広場站で，やはり台湾企業の進出が多いところだという）から徒歩約３分のところにある。

コマニー本社は小松にあるが，今回，３月15日に金沢大学のマイクロバスで一般道を利用して小松空港に向かう途中で車窓からその本社を見ることができた。

今回は，上海虹橋站から高速鉄道に乗って南京南站まで行き，地下鉄１号線南延長線に乗り換えて竹山路站で下車し，そのまま南京工場まで行った。なお，帰りは地下鉄を利用してホテルまで移動する予定だったが，同工場のマイクロバスでホテルまで送っていただいた。

写真８．事務室入口で出迎える村中敏昭氏

写真９．コマニー南京工場会議室



訪問日時：2012年３月16日　　14:00～16:00

訪問場所：コマニー南京工場（南京市江寧区江寧科学園天元中路36号）

応 対 者：村中敏昭・華東（経営企画本部本部長）・米谷俊治（原価管理室副室長）

我々がコマニー南京工場事務室に到着すると，村中敏昭氏をはじめとして経営陣が出迎えてくれた（玄関で我々の到着を待っていた。写真９を参照）。

そして，会議室に案内されると，席上には資料「格満林の会社案内について」とともにペットボトル入りのお茶とお土産の茶葉2箱入りの紙袋が用意されていた。

最初に，会社の概要案内を含むプロモーションビデオ（中国人顧客向けであろうか，全て中国語だった）を見せていただいた後に，概略的な説明をしていただいた。

近年，日本のパーティション（間仕切り）市場が縮小しつつあるのに対して，逆に，中国市場は拡大しているという。そして，落札すると，ビルまるごとの成約となるので，利益が大きいようである。コマニー南京工場では，環境認証証書や資信等級証書などの認証を獲得することに力をいれてきたが，これは入札の際に多くの認証書があると落札しやすくなるからである。

これまで落札した有名なところとしては，上海市の環球金融中心（森ビル）・北京市の中央広播電台・南京市の紫峰大廈などがあり，また，天津経済技術開発区に建設された泰達国際心血管病医院へ納品してからは，噂が広まって，病院の受注が増えた。例えば，蘇州大学付属病院・福建省台州市人民医院・長春吉林医科大学第一病院・哈爾浜順邁病院・広東省深圳邁瑞医院などへ納品した。

2012年2月現在，コマニー南京工場の従業員は336人で，全体では男女半々だが，営業関係は男性が多く，電話注文・問い合わせのオペレーターはほとんどが女性である（コンピューターによる製図・作図の作業者は男女ほぼ半々だったが，加工作業の現場は男性が多かった）。

中国では労働者の流動性が高く，1ヵ所で長期間にわたって働く労働者は少ない上に，近年は労働者の労働意欲が低下していると感じるという。というのは，都市近郊の農村は経済開発区となったことで，かつての農民たちが土地成金となって富裕化しているので，お金を稼ぐためにがむしゃらに働こうという気持ちがないためである。いかにして労働者のモチベーションを高めるかが労務管理上の課題となっている。

現在，南京の南の溧水県経済開発区に第二工場（格満林溧水第二工廠）を立ち上げようとしているところである（すでに用地を獲得した）[7]。南京工場からは車で30～40分程度のところにあるが，現在のところ，公共交通機関は全くない。

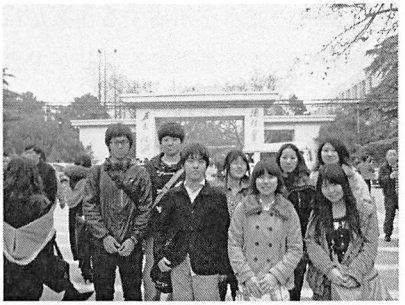
(2) 南京大学

地下鉄１号線に乗って珠江路站で下車し，最寄りの南京大学南門から入って，学生に南京大学の正門（写真10を参照）まではどのように行くかを尋ねさせた（事前に練習していた実践的中国語会話を実践させた）。

正門に到着すると，この日は，ちょうど南京大学で卒業式が行われていたようで，角帽に黒のマントを身につけた若い教員あるいは大学院修了生が多く見られた。

そして，南京大学図書館と金沢大学駐在南京事務所（大学院GPによって開設）を訪問した後，金沢大学の学生食堂との比較も兼ねて，南京大学の学生第一食堂で昼食をとった。南京大学の学生は，学生証を提示して食堂用のICカードを購入して注文・支払いをしていたが，外来者は定価に40％を上乗せした料金で学生食堂を利用することができた。全員，７元の麺を10元（約130円）で食べた。

写真10. 南京大学正門前



(3) 南京大虐殺記念館

当初の計画では，総統府（国民政府時期）・南京図書館・夫子（孔子）廟を訪問する予定だったが，学生の意向も聞いて，急遽，南京大虐殺記念館を参観することにした（教育目的のために参観料は無料）。同記念館は，地下鉄２号線雲錦路站で下車して地上に出ると，すぐに同記念館が見えた。雨が降る悪天候にもかかわらず，参観者が長蛇の列をなしていた。筆者は，これまで何度も訪問しているが，毎回，規模が大きくなっており，展示品（レプリカやオブジェも含めて）もかなり整備されてきているような感じがした。

筆者が1980年代後半に最初に参観した時は，バスで近くまで行って，通行人に道を聞くと，知らないと答える人が多かった。そこで，日中戦争中の南京大虐殺事件のことをたどたどしい中国語で説明すると，大勢の人に囲まれ，お前はどこから来たのかと聞かれ，日本人で，中国近現代史を研究していると答えると，特に反発や批判の声が出てくるわけでもなく，記念館らしき建物の工事に従事したことがあるという人がいて，場所を教えてくれた。

Ⅲ　無錫市

(1)　ユニベール無錫工場

当初，ユニベール無錫工場へはタクシーに分乗して訪問する予定だったが，同工場副総経理の高野哲男氏のご厚意により，同社の送迎用マイクロバスを用意していただくことになった。というのは，最近，同社は工場を移転したばかりだった上に（2月20日に開幕式を挙行したという），同工場の周辺一帯は開発が始まったばかりで（当日，同工場のまわりの並木を植樹する作業が行われていた），2012年版の地図でも工場の場所や道路を確認することができないという事情があるからである。

同工場の送迎用マイクロバスでホテルから約30分かけて同工場に到着すると，まず，2階の会議室で副総経理の高野氏に同工場の沿革と概況を説明していただいた後で，工場内を見学し，最後に，再び会議室で質疑応答を行った（質疑応答が終わりかけていた頃に，総経理の遠藤孝氏がやってきて色々な話しをしていただいた）。遠藤氏は1年のうち約3分の2は中国で生活しており，中国で暮らすのは今年で19年目になるという。また，同工場は，3階建てで（床面積は1フロワーにつき旧工場の2倍余り），1階が搬入された原材料（生地・布地）と搬出する製品（カーテン）を梱包したものを保管する倉庫であり，2階（安価な既製品の生産）と3階（高級な特注品の生産）が作業場となっていた。

当初，業務の妨げにならないように，1時間半から2時間程度で参観を終える予定だったが，高野氏の説明に加えて，総経理の遠藤氏からも非常に興味深いお話を聞くうちに，訪問時間が予定より大幅に長くなった。

写真11. ユニベール無錫工場

訪問日時：2012年３月20日　　13:30～16:30
訪問場所：ユニベール（優昵蓓楽（無錫）装飾製品有限公司）
（無錫市錫山経済開発区錫虞路）
応 対 者：遠藤孝（董事・総経理）・高野哲男（副総経理）

ユニベールは2007年に無錫に進出してきた。そして，当初の来料加工（日本から原材料の布地を輸入し，中国国内で加工して日本のニトリやホームセンターなどへ輸出する）から一般貿易（中国国内で布地を購入し，加工した製品を日本へ輸出する）の拡大へと変化しつつある。昨年は，東日本大震災[8]後の復興特需で，対日輸出が増加し，年間約117万セット（カーテン２枚で１セット）で約15億円売り上げた。

ただし，現在，その一方で，中国経済と世界経済に関する直近の変化（中国における富裕層の増加と日本市場における飽和状態）に対応して，経営戦略の転換をはかろうとしている。すなわち，簡潔に言えば，対日輸出から内販（中国国内販売）へ，安価な既製品生産から高価な特別注文生産へ転換することによって中国製品との差別化をはかろうとしている。

現在の最大の悩みは，中国における原材料費と人件費の急増である。ユニベール無錫工場の平均賃金を見てみると，4年前は860元だったが，現在は1,140元（残業代などを含めると1,400元くらいになる）にまで上昇してきている。男性の労働者は仕事が長続きしないので，女性の労働者が多くなっている。日本人幹部３人の他に，中国人の女性事務員が15～16人おり，このうち

6～7人は日本語ができる。労働者の半数近くは地元の人間であるが，その他，安徽省や南通からも働きに来ている。近年，低賃金労働者を確保するのは難しくなっているが，春節後は比較的雇傭しやすいという。

一方，遠藤氏からは，労働者保険(日本人も含めて，労働者全員が保険をかけることが義務づけられており，企業側が高額の保険金負担を強いられている)，工会(官製の労働組合)，労働者の解雇とそれに伴って生じた訴訟事件などについて，非常に興味深いお話しを聞かせていただいた。

現在，中国社会では経済発展を反映してか，若者の間にはお金一辺倒(儲けるためにがむしゃらに働く)から余暇を求める傾向が出てきているという。

なお，遅くとも2年以内には，無錫市内に東西と南北を貫く2本の地下鉄が開通する予定であるという。

(2)　王興記餛飩店[9]

3月20日の昼食は，長い歴史を有し(1913年創業)，庶民の人気[10]も高く，来客も多い王興記餛飩店(旧来の店舗が市街地再開発のために壊されて崇安寺歩行街に移転している)で三鮮ワンタンと小籠包(肉汁に甘みがあり，日本でも知られている上海市南翔鎮の小籠包[11]とほぼ同じ味である)を食べた。

そして，昼食後，焼き栗を買っていると，そのすぐ近くに「N多味寿司」(高野氏も知っているという)という看板を掲げた店があり，若い女性がたちが行列をつくって寿司を買って持ち帰っていた。

(3)　レストラン「小上海」[12]

無錫市街地の中心部に位置する歩行街(昼食をとった崇安寺歩行街の近く)にある小上海というレストランで夕食をとった(非常に人気がある店で，来客が多いので，予約を入れておいた)。同店の若いウェートレスは蘇北(江蘇省北部)出身で，外国人と話しをしたのは今回が初めてで，極度の緊張状態の中でパニックに陥ってしまい，学生が話す中国語を理解することができず，苦労していた。そこに，無錫人の女性経営者(老板娘)が出て来て対応していた。近年，無錫市の若者は，飲食店のウェーターやウェートレスのような低賃金労働には従事しないので，必然的に外からやって来た若者が多く雇傭される。

おわりに

筆者にとって中国華東地域に進出している日系の事務所・工場・店舗などへの正式の訪問は2度目だったが，学生たちにとっては初めてのことだった。今回，学生たちは中国華東地域経済及び日系企業などの経済活動について様々なことを感じ，また，その受けたであろうインパクトは非常に大きかったと想像される。その詳細は，学生たちによる報告書を待ちたい。

今回は，時間的な制約があり，あるいは，ミスすることが許されない場合を除いて，学生には極力自力でやれることはやってもらった。例えば，料理の注文や買い物はもちろんのこと，公共交通機関の利用（及びそのチケットの購入），ホテルのチェックインとチェックアウト，銀行での両替などである（上述のように，そのために必要な実践的中国語会話を事前に練習していた）。ホテルのチェックインは可能な限り，各部屋ごとに学生に任せたが，中国語ができない学生は英語で対応していた（これは，実践的な英会話の練習になったと思われる）。実は，初めて中国に来た学生にいろいろな手続きなどを自力でさせることは，引率者としては二重にも三重にも労力を費やすことになるが（時間的な点や気遣いなどを考えると，こちらが全て事前に手配・手続きなどをしておいた方が楽である），学生の自主性育成と経験を積むという教育的観点から面倒を見すぎない（過干渉・過保護にしない）ことにした。この点は，今日の学生に欠けており，逆に，企業が学生（大卒者）に対して最も求めていることであり，筆者が近年の大学教育の方向性に非常に疑問を持っている点でもある。

そもそも，大学（少なくとも社会科学分野）は批判的精神を育成するべき場であり，権力・権威を批判する勇気と同時に自らが批判されることにも耐えうる精神力をも鍛えなければならない。もっとも，学問の世界では，相手の考え方を批判するべきであって，相手の人格否定をするべきではない。

なお，今回の訪問に先立って，2月27日～3月12日，筆者は文献資料収集と華東農村調査のために上海・無錫・南京を訪問していたが[13]，2月27日に小松空港から上海浦東空港へ向かう機内でたまたま隣の席に座っていたのが金沢大学大学院社会環境科学研究科の卒業生[14]で，金沢の中小商社に就職し

て上海において貿易事務の仕事(主に商品の発掘と買付)のために出張していた(同商社は規模が小さいので，上海に事務所などは置いていないという)。

上海では，地下鉄の駅における荷物検査はかつてほど厳格ではなくなっており，小さなカバンなどは検査対象にならなくなっていた。

最後に，今回の華東地域の日系企業等訪問を無事に終えることができたのは，金沢大学人材育成WG事務局職員をはじめ，突然の訪問を快く迎えていただいた駐在員事務所や企業のみなさんなど，多くの方々のご協力と御支援によるところが大きかったことは言うまでもないことであり，ここに改めて衷心より御礼を申し上げます。

注

1）参加した学生は，高藤杏里[アジアコース](1年生)，木股和也[アジアコース]・木島丈太[アジアコース]・中村優子[アジアコース](2年生)・大城慧[米英コース]・山口未花[米英コース]・山田美奈里[日本・日本語コース]，山口あか里[国際社会コース](3年生)の男子3人と女子5人だった。また，このうち，中国語履修者は4人であり，アジアコース4人，日本・日本語コース1人，英米コース2人，国際社会コース1人だった。この中には海外に出かけたことのある者も多かったが，中国への訪問は全員が初めてだった。

2）当時の訪問記録として，拙稿「華東地域における日系企業の現状－2009年9月－」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号，2009年12月)・同「中国華東地域訪問記録－2010年2月・3月」(『金沢大学経済論集』第31巻第1号，2010年12月)を参照されたい。

3）予算上の制約から，2時間分の講師謝金しか支払うことができなかった。なお，訪問先への問い合わせと日程調整，ホテルの宿泊予約なども，筆者が1人で行った。

4）増値税は，企業などが収益を上げた場合に，その額に応じて課されることになる。

5）拙稿「華東農村訪問調査報告(7)－2012年3月，江蘇省の農村」(北陸史学会『北陸史学』第60号，2013年1月)を参照されたい。

6）同じように，地下鉄の駅に直結しているショッピングモールは，地下鉄2号線・4号線の乗換駅になっている中山公園站にもそれぞれ1つずつあった。しかも，地下鉄4号線の駅に直結しているショッピングモールは地下1階・2階に巨大スーパーマーケットのカルフールがあった。

7）後になってわかったことだが，溧水県は台湾華僑のコマニー南京工場の最高顧問である李氏(国民政府時代に南京に居住して国民政府内で働いていたという。このため，南京には有力な人脈があり，コマニー南京工場の立ち上げをスムーズに進めることができた)の出身地だった。

8）東日本大震災で発生した巨大津波によって，ユニベール仙台工場は壊滅し，従業員3人が死亡したという。

9）王祖華「我的父親与王興記餛飩店」（中国人民政治協商会議江蘇省無錫市委員会文史資料委員会編『無錫文史資料』第21輯，1989年3月）を参照されたい。

10）「人気」あるいは「超人気」という日本語が，現在の中国ではそのまま日本語と同じ意味で使われている（ただし，若年層のみにしか通用しないかもしれない）。

11）南翔の小籠包については，拙稿「中国華東地域訪問記録－2010年2月・3月」（『金沢大学経済論集』第31巻第1号，2010年12月）を参照されたい。

12）無錫は小上海と言われてきた。

13）拙稿「華東農村訪問調査報告(7)－2012年3月，江蘇省の農村」（『北陸史学』第60号，2013年1月）を参照されたい。

14）王冬氏は，1989年の第二次天安門事件の時は大学1年生だったという。